

読書のすゝめ

その9

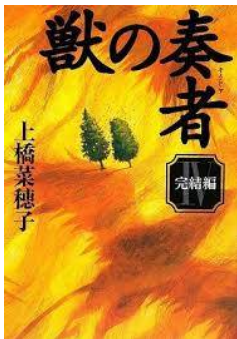
H 27 6 / 4

新着図書 (83冊)

リクエストのあった本が5月末に入りました！
「猫弁」シリーズ・「心霊探偵八雲」シリーズ・「妖怪アパート」シリーズも届きました。上橋菜穂子「獣の奏者」も！ 数研の問題集をリクエストしてくれた1年生。おまたせしました。中間考査も終わりましたので、ぜひ計画的に活用してください。



ツバメの雛が5羽。親からエサをもらっています。



※5月の図書館利用状況

開館日数 16日

利用者数 332人

「太宰治の辞書」北村薫 新潮社

北村薫は『空飛ぶ馬』でデビューし、以後『夜の蝉』『秋の花』『六の宮の姫君』『朝霧』と続く《私》シリーズをもっているが、本作はそのシリーズの実に17年ぶりの新作です。

作中時間もおそらく17年がたち、新人編集者だった主人公《私》も、中堅の編集者となり、雑誌の編集をするともに自分の企画で単行本を出版できる立場となっています。高野文子の表紙絵も懐かしく、中学生の母親ともなっている《私》の時の流れに思わず自分の来し方と重ね合わせて一人感傷的になってしまいました。

芥川の『舞踏会』の花火、太宰の『女生徒』の「ロココ料理」、朔太郎の詩のおだまきの花…その世界に胸震わす喜び。自分を賭けて読み解いていく醍醐味。時を重ねて変わらぬ本への想い…『私』

は作家の創作の謎を探り行く。作家は何を伝えているのか…。編集者として時を重ねた《私》。北村薫の【文学】に対する姿勢や「学び続ける」ことに、かつて文学で生きてきたかったハズの自分が、何一つ成さずにいることを、ただただ恥ずかしく…。それでも、今のこの時に再び手に取り、読むことができる作家がいることに幸せを感じた一冊です。

できることなら、『空飛ぶ馬』からどうぞ！ 水無月の出会いからはじまります。

「日本文学のスズメ」や「紫式部日記」「枕草子」は漫画を取り入れながら、近代を代表する作家の紹介、あるいは平安時代の女流作家について、丁寧でまじめな解説とともに、時代背景や裏話が書かれています。京都の老舗一保堂6代目夫人が一服のおいしいお茶がもたらす豊かな時間を語る「お茶の味」もどうぞ！